村野次郎創刊

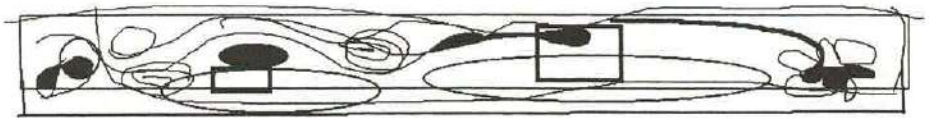
香蘭

2024年（令和６年）９月号

創刊100周年記念特集号　資料編

第 101 巻　　第 9 号　　通巻 1125 号

二〇二四年（令和六年）九月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇一巻第九号



香　　蘭

2024年（令和６年）９月号
第101巻　第９号　通巻1125号

創刊100周年記念特集号　資料編の部　目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（１０９）……桜井京子…表二
資料編　１９２３年（大正12年）～２０２３年（令和５年）の歩み
選者の在任期間……丸山三枝子…5
全国大会実施状況……髙畠憲子…8
香蘭賞・香蘭新人賞の人々……桜井京子…10
香蘭叢書・会員歌集……渡辺礼比子…21
物故会員のおもかげ……桜井京子…42
香蘭21の会、明宝研究会例会記録……市川義和…56
「香蘭」表紙絵の作者名一覧表……市川義和…62
年表……68
表紙絵……山口蓬春「桃」
目次カット……和田和雄

香　　蘭

2024年（令和６年）９月号
第101巻　第９号　通巻1125号

創刊100周年記念特集号資料編　９月号の部　目次

招待作品（奇数月連載）⑥　夢三夜……加藤英彦…152
作品
一……154
二……172
三……181
推薦香蘭集……187
香蘭集……188
作品一　十首選（七月号）髙畠憲子選……164
作品二・三　十首選（七月号）丸山三枝子選……166
村野次郎への旅（173）昭和期の「香蘭」（八）……千々和久幸…168
一頁公論（40）富士山と与謝野晶子～上九一色村について思う～……加瀬喜美江…171
「香蘭」とともに（11）ほんとうにあたしでいいの？……鈴木桂子…178
続・酔風船（9）かなしみの繭……千々和久幸…179
エッセイ・自由研究　ランニング……土井紘二郎…192
焦点（七月号）比喩の効果……渡辺礼比子…194
作品評（七月号）作品一……伊藤康子…196
作品二……川原優子…198
作品三……能城春美…200
香蘭集……馬場美信…202
七首抄（七月号）……白井・渡辺（君）・安藤（経）・栗原…205
緑地帯……関・木村・髙畠（崇）…206
明宝研究会第一五三回　六月例会
木俣修歌集『みちのく』と香蘭……小原裕光…210
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……218
歌会及び会合・会員消息・その他……225
編集後記・新宿日記……230
表紙絵……山口蓬春「桃」
目次・緑地帯カット……和田和雄・表三

村野次郎作品　私の愛誦歌（109）

桜井京子

われ病みて留守にせし家垣根には
山茶花すぎて桃咲きいでぬ

『樗風集』

このほど「香蘭」創刊100周年記念事業として『村野次郎全歌集』が刊行された。掲載歌は『樗風集』巻頭の小題「病後閑居集」とある十二首の、最初におかれた歌である。

昭和十年、次郎四十一歳の折の作。この年、白秋が「香蘭」の顧問を辞するという大事件が発生し、記録によると、次郎は胃潰瘍を患って入院加療したとある。

この歌は、久し振りに戻った次郎が、垣根の花に季節が冬から春に移ったことに気づくのである。次郎は生涯にわたって大きな病気をしておらず、壮年期における胃潰瘍は、白秋の辞任が引き金になったと思われる。だが、病から癒えて戻った次郎は、新たな季節に向かって踏み出そうとしているように見える。

次郎の白秋への敬愛の念は生涯変わることはなかったが、早春の庭に咲きはじめた桃の花は何とも愛おしい。

（『村野次郎全歌集』12頁『樗風集』に掲載）

加藤　英彦

夢三夜

どこで道をまちがえただろう振りむくと穂すすきばかりがやたらと靡く
何かがしずかに壊れはじめるサイフォンが朝の食卓に騒だちはじめ
あれはいつの記憶のかけらいもうとが駆けだしてゆく夏の足おと
さくら前線吹きすぎてのち朝のテレビは東欧に爆死の子を映しだす
どの夢に遊びて来しや手触るればシーツに母の指さきの冷え
覚束ない手つきに掬うスゴ麺の3分が湯気のなかに現わる
炊きたての白米にしゃけの身をほぐしあの日のように熱き湯を注(さ)す
紫陽花が陽にかがやけばすこしだけ母のピアノが狂いはじめる
もうだれも帰ってこない夕ぐれを老いた少年たちが仰げり
喉もとにこみ上ぐるものあの夢の饐えたる匂いに灼かれて目覚む

◇ 招待作品 ◇　奇数月連載⑥

戦争の評論家多く現れてロシア・ウクライナの紙芝居見つ　　千々和久幸

「香蘭」七月号の千々和久幸氏の一首である。その後イスラエルによるガザ侵攻の報道が溢れだしてロシア・ウクライナ情報はすこし影を潜めたが、事態は一向に進展していないどころかかなり危機的状況にある。確かに多くの戦争評論家がコメンテーターとしてあちこちの番組に登場した。

彼らは欧州・ロシアが専門の学者だったり軍事評論家だったり、自衛隊の元最高幹部だったりした。軍事的政治的な分野では圧倒的な知見を有しているし、今まで興味を抱いたこともない兵器の精度や敵地攻略のための地政学や有効な爆撃手法にわたしはやたらと詳しくなった。軍需産業の経済効果にはなぜだれも触れないのだろうとやや疑問に思いながら、わたしは自らのあまりにも無知すぎる脳を埋めるのに精一杯だった。

小泉悠や高橋杉雄などの軍事専門家の論評にわたしは蒙を拓かれ、ロシアの眼・ウクライナの眼の双方から情勢を徹底分析する豊島晋作の報道番組にも多くを教えられた。そして短歌総合誌が特集を組み、わたしは私なりに作品なども発表してきた。

さて、わたしの見ていたあれは紙芝居だったのだろうか。熾烈極まる戦地の現況は措くとしても、報道とは編集された二次情報であり一定の作為のもとに再構成されたドラマの一篇である。ロシアの国内で流される報道が壮大な国策芝居であるとすれば、ウクライナ国内にだってそれなりのプロパガンダはあるだろうし、米国の巧みな情報操作にいたっては自国の戦争犯罪が正義の衣装を纏っていたりもする。日本の報道だって例外ではない。あの映しだされた一枚一枚の映像に嘘はないとしても、その集積が語ろうとするものが何であるかを見誤ると、何がほんとうであったのかが見えなくなる。「紙芝居見つ」と断じた詩人の眼を忘れたとき、わたしたちの表現もまた危うい。

わたしはそんな紙芝居の一枚を短歌で復元してみせただけではないのか。むしろ新たな一枚を追加したことで、真実ならざる何かを補強してしまったのではないか。短歌はルポルタージュではない。そう、モニターに映るのはあくまで現実の断層であり、わたしもそこでは立派な観客のひとりでしかない。

四選者の作品

フライング　　平塚　千々和　久幸

XとYはいずこで交わるか虚数の闇に咲くアマリリス
朝顔の傍らに咲き毒あると見えぬ夾竹桃はわが父
ちちの実の父の日の父は酔い痴れて遅々たる日々を寄辺なかりき
海紅豆の花の散りゆく日を数え海近き町に住み古りゆけり
意味もなくコーヒーを飲み果てもなく紫陽花に降る雨ばかり見て
生き生きと街を歩める娘らの眩しく見えて梅雨明け近し
フライングばかりして来し半生か「見るべきほどの事」いまだ見ず
若き日の水着姿もありにしを死なれて妻のアルバムは見ず

ともすれば　　横浜　渡辺　礼比子

わが居間を母の面影過ぎれると振り向きにけりあす七七日
ともすれば話題に上せ宜しとせり母の延命せざりしわれら
吸入器のみを頼みてひっそりと幽明の境越えゆきし母
ワイキキでここは名古屋かと問いし母あれが病の兆しなりしか
温泉の裏道ゆけば水張田に蝌蚪はつぎつぎ湧きいずるかも
齟齬ありて離れゆきたる友いずや中央本線「日野春」を過ぐ
小さなるウルトラマン出で敵われは成敗されたりライン画面に
「ご利用ができる」ではなく「ご利用になれます」とうべし電子の声よ

小笠原（一）　　鎌倉　高畠　憲子

旅の虫そろそろ騒ぐ頃あひか夫の机上にある島の地図
長年の夢をかなへにゆくと言ふ補陀落にあらず小笠原へと
長きながき企業戦士の任退きし夫晴ればれと船上の人
「ご夫君はお元気ですか」「はい、今は渡海中です」タカイにあらず
酒飲めず酔ふことの無き人なるが外洋に出で船に酔ふとふ
洋上に半日圏外の人となる夫より途絶ゆラインもTELも
そのかみの白秋夫妻の来島し妻のみ先に帰りたりとふ
びいでとはディゴの花なり白秋の詠ひし「びいで」咲く頃なるか

山鳩　　我孫子　丸山　三枝子

しくしくと雨降りやまぬ菜の花忌　持病ひとつを飼い慣らしゆく
耳よりの話があると言うように近づきてくる朝の山鳩
くぐもりて鳴く山鳩にしばらくは心あずける夏のあしたを
かたわらに立っている樹に寄りゆける気鬱なる日の黄昏を来て
風車を見ればオランダ思うひとたびも行きしことなし遠きオランダ
「いろはす」を飲むたび友の〈い・ろ・は・す〉を詠みたる歌が蘇るなり
止みそうもなき水無月の雨のなか貨物列車の轟と過ぎたる
ででっぽうででっぽうとぞ繰り返し世間は虚仮と山鳩が鳴く

作品一十首選

（七月号作品から）

高畠憲子選

・お荷物になりましょうがと往にぎわに狐が稲荷を包みくれたり

千々和　久幸

帰りぎわ、とふつうに言わず、〈往にぎわ〉と詠み、まずは読者をぎょっとさせる。往生の往の字、である。どこかで飲んでの帰り際、女将さんがこう言って稲荷寿司を包んでくれた、という日常の場面かもしれない。だが、漢字一字を替え、女将を〈狐〉に替えただけで、非日常へと一首が飛翔する。この作者の言葉のセンスには常に驚かされて来た。古典落語に精通している、という強みもあろうが、後進を刺激して止まない才知が歌にほとばしっている。

・できるのはこんなことだけ　死に隣る母の冷たき脚摩りおり

渡辺礼比子

本社歌会に出され、誌上で再会した作品。作者は先ごろ、百歳に近い天寿を全うされた母上を看取った。偶々、歌の背景を知り得たが、知らずとも親の臨終場面とわかり、最期を見守る子の心情が、下句の具体的行為と相まって読者に迫る。上句で心中を吐露するが、こんなこと、どころではない。子としてこの上ない幸であると筆者は素直に思った。ここまでに至る長い介護の道のりの最後に存分な別れができた。親の送りに悔いは付きものというが、この親御さんは、良い子孝行をされたのだろう。

・追ひ込まれ今宵は徹夜と覚悟してパソコンに向かふ目薬そばに

市川　義和

香蘭百周年の記念号発刊、祝賀会を兼ねた全国大会、村野次郎全歌集発刊、そして、今号の百年通覧の年表。全て、この作者が段取りの中心に居り、通常号の編集中枢に関わる仕事に加え、奮闘された。決して表立って労苦を口にされないので、察するのみであったが、文字通り身体を張っての追い込みをされたのだ。目薬、という小さな具体物が、その時の状況を雄弁に語っている。

・食べて寝て会話少なくなりし夫と同じ空気の中に生きゆく

柏原　陽子

寝食を共にしていて、会話が少なくなっている夫婦。背景を知らずとも上句で、長い年月を連れ添ってきた夫婦と察しがつく。四句より、一方が施設や病院にではなく、同じ家に一緒に暮らしているのだろう。事情あって、ある時期は相方が入院でもされたか。無事退院し、自宅という寛げる空間、つまり同じ空気の中を共に生きている感慨がしみじみ湧いたのだろう。生きゆく、に実感がある。シンプルな言葉による一首だが、飾りの無い本音がある。

・たった今成りたる一首を留めんとスマホ取り出す道の端に寄り

斎藤　俊子

似たような場面に出逢ったことがある。とある会合の帰路、前を行く女性歌人がふと立ち止まり、スマホに何やら打ち始めた。今は手帳ではなくこのツールを活用する人が増えた。この作者も同じだろう。道の端に寄る、に後方の迷惑にならぬようとの気配りがある。

鮮度の衰えぬうちにキャッチされた歌が、こうして香蘭に載る。

・とある夕とがった緑のクレヨンを突き刺してみる五月の鍵穴

中村かよ子

独自の個性が光る一首。一行詩と呼びたいような作風である。結句八音ながらインパクトがある。五月の鍵穴って何だろう。この鍵穴の向こうには、何かが閉じ込められている。扉か抽斗を開けて解放したくても鍵が無い。ともかく、とがった緑のクレヨンを突き刺す。何とも柔らかなそれを。すぐ折れるとわかっていても抑えきれない衝動。万物が緑となる五月の夕の、狂おしいような空気がある。もちろん、実景ではない。評をしきれない筆者ももどかしい。この作者の秘めたエネルギーと焦燥感が一首に炸裂している。

・レンタルのパジャマに病を養へど借りられぬものひとつがありぬ

西野美智代

身内が急に入院する、という体験が筆者も何回かあった。作者とは逆の立場ながら、入院用品レンタルの経験をした。今は院内が行き届いて、借りられないものはほとんど無いと言ってよい。しかし、作者はその中で、借りられぬもの、に気づく。それはたったひとつのもの。辛いことがあると人はよく、代わってやりたいよ、と言うのを思い出す。代わりのないお身体を、何とぞお大事にと願う。

・息子が持ち来し桜の花は散りたれど葉桜となりまだ卓上に

故　本田　民子

この欄を書いている最中に、作者の訃報が届いた。一度、全国大会でお会いしている。小柄ながら笑顔の印象的な方で、長年、長崎支部で多大な貢献をされた。遺作となってしまわれたのが残念である。この一連に、身内や友人を詠まれた歌が続く。中でも、ご子息からのこの桜の一首が心に残る。花が終っても大切に活けて、葉桜の緑を愛でられたのだ。歌は遺る。卓上に、親子の心の行き来が生き生きとあるのが見える。ご冥福を心より祈る。

・駅前の郵便局まで行けました自分をほめてスタンドを消す

牧野　道子

先ごろの全国大会と祝賀会での作者の名司会ぶりは、いまだに印象が鮮やかである。お元気に大役を務められたが実は、その背景に、大きな病の克服とリハビリがあったと聞く。役目に向け、リハビリと体調を調える日々には精神力が要ったことであろう。その一こまに生まれた歌かと想像。普段なら何でもない郵便局までの用達も、リハビリのひとつであったかもしれない。出来ない事でなく、ささやかでも出来た事を振り返り、自分をほめ、ひと日を締めくくる。その前向きな心の積み重ねが、当日の作者を一段と輝かせた。

・嬉しさは血潮の如く噴きていん尊富士は歴史に勝てり

森田　徹

この春場所に優勝した尊富士。新入幕での優勝は、実に百十年ぶりという、明るいニュースとなった。若い力士本人の嬉しさはそれこそ、血潮のように噴きあがったであろう。この時の作者は療養の身であり、身体の不調があったことが、先号の誌面からわかる。そのような時に、まさに作者にとっても嬉しい出来事であったろう。作者の嬉しさも血潮のように噴きあがり、一首となった。結句、歴史に勝つ、とは大きい言い方であるが、百十年無かった事を成し遂げた、若い力士への賛辞としての表現であろう。

作品二、三　十首選

（七月号作品から）

丸山　三枝子　選

・長男の嫁だけ「あねさん」と呼ぶ習い　だから私は「笹屋のあねさん」

小笹岐美子

〈金婚式〉の連作の一首。長男の嫁だけ「あねさん」と呼ぶ習いは、新婚時代に暮らした土地の習慣なのだろう。因みに能登では、長男を「あんか」、次男以下は皆「おじ」と呼び習わし、長男の名前が屋号にもなっている。「笹屋」は屋号と読んでみた。五十年を経て家族は十一人になったという。「あねさん」と呼ばれる責任感からの辛苦が偲ばれるが、「あねさん」と呼ばれる誇りもあったのではないか。「あねさん」と呼ばれるに相応しい風貌の作者だ。下句の軽妙な表現から窺えるその人生は分厚いものである。

・桜花はらりはらりと散る夕べ過去と未来を漂いながら

竹本　幸子

開ききった桜はやがて散る。二句のオノマトペからは風のないときの花の散り様が思われる。夕刻の、どこか情緒を感じさせるその散り方が、作者には過去と未来を漂っている風情に見えたのだろう。「漂うように」などの直喩ではなく、「漂いながら」と、桜花を擬人化したことで歌が立ちあがった。過去と未来を思って漂っているのは、作者自身の想念でもあろう。〈滅びの美学〉の言葉が浮かんだ。この気分を是とするか否かで読みの評価が違ってくるだろう。情緒的な見方を突き抜けて先に進んでほしい気もする。

・間引き菜を抱えし夫は裏金を渡すがごとくそっと手渡す

藤本佐知子

「間引き菜」は、野菜が充分に生育するように、その間を空けてやる作業。「夫」には、すくすく育っている野菜を途中で摘んでしまった後ろめたさがあり「そっと手渡」したのだろう。そんな仕草を見て作者は、政治家の裏金疑惑問題を思い出した。政治家の裏金疑惑問題は、今日の国会中継でも議論されていた。まじめにこつこつと生きている平民と、私腹を肥やすことばかり考えている政治家との対比は痛快だ。三句以下の、ウイットの利いたフレーズは、政治家批判の歌としても説得力がある。

・人生はいろいろありて大谷に天皇家にも私（わたくし）にさえ

三澤　幸子

大谷翔平選手が被った水原事件には驚いた。天皇家のいろいろはここでは断定し難いが、天皇家というだけで作者自身との比較になるだろう。作者自身にも大小さまざまに日々、「いろいろ」のことが起きる。大谷選手や天皇家のことは報道で知らされるが、平凡に生きている「私（わたくし）にさえ」との、結句の思いが全ての歌だ。「大谷」、「天皇家」と、具体的に身にひきつけて詠まれている。「私（わたくし）」の人生にも闇の部分はありまた、平凡ながら丁寧に生きている部分もある、との作者の心情が結句でクローズアップされた。

・蕗の葉に去年（こぞ）のトカゲの地吾郎か首をかしげて思惟するごとく

安田　恵子

「地吾郎」は作者の付けた親愛なる名前なのだろう。その「トカゲの地吾郎」は作者の庭にいるのだろう。彼は去年も来ていたと言う。今年生まれたトカゲかもしれないが、見分けが付かないから今年もきた地吾郎よ、と呼びかけているようだ。トカゲにはトカゲの思惟があり、作者には作者の思惟がある。この作者は思惟する人であることがよく分かる。

・チューリップかりとるように児を集め園バスに乗せ走りゆきたり

脇谷　房子

保育園の送迎バスが、園児を乗せて行く場面に出交わした作者。ここでは、園児の一人一人を「チューリップ」になぞらえた処に納得が行く。丁度今ごろ、赤や白や黄色のチューリップが花壇を彩っている。「かりとるように」は「チューリップ」の縁語のように使われているのだが、自然に嵌まっていると読んだ。こんな可愛いらしい園児たちなら、実に刈り取りたくもなるではないか。「園バス」の「園」の説明めく語が気になった。四句「バスに移して」など。

・桜です　そろそろ私咲きたいのあなたを惑わすつもりはないわ

川久保百子

面白い味わいだ。今年の桜は人心を惑わすように咲き泥んでやっと咲いたが、桜になりきって詠まれた呟きのような呼びかけが愉快だ。下句の人間臭さに親しみを感じた。馴染み深い樹木の象徴のような存在の「桜」だったから良かった。こう詠まれたら、他のどんな樹より納得が行く。前半生は清廉潔白に真摯に生きてきたけれど、後半生はもう咲くことを抑制する必要もない。そんな思いが桜に託して詠まれている。思うがままに自在に生きたい、と言っている。思わせぶりに言っているこんな悪戯心が何とも面白い。

・ざらざらと私の中に砂ぶくろあるかもしれぬ毒舌吐いて

佐伯　弥生

何処かで思わずも毒舌を吐いてしまった。そんな負の感情が説得力籠もる比喩で詠まれており心惹かれた。負の感情を詠む歌の方に読者は惹かれる。ここでは、四句切れの文体が利いている。自己嫌悪に苛まれる作者。初句の、「ざらざらと」の「と」を受ける動詞が下にないから落ち着かない感じが残った。「ざらざらの」、或いは二句「私の中に」ではご不満だろうか。

・パンのみに生きるにあらず心には栄養のある言葉がほしい

篠永　路子

〈考えを失う病　車椅子で春の陽のなか桜にほほえむ〉の歌があり、介護士である作者の日常が彷彿とする。「人はパンのみにて生くるものにあらず」はマタイ伝にある言葉だが、作者が職場で携わる日常の人のことと読めば、いくぶん事情が変わって見えてくると思う。思考が途絶えてしまった人にも、どこかに人間らしい感情が残っているのかも知れない、と作者は危惧しながら、患者さんと丁寧に向き合って居るかも知れない。

・さくら花終の旅路は風まかせ「リンダリンダ」と楽しげに舞う

中島由美子

「終の旅路」は、桜の花が散ってゆくときの様子。哀しげに、寂しげに舞うのではない、「楽しげに舞う」と詠む。桜花を惜しむ歌は古歌以来の定番なのだが、そうではない明快さが作者の持ち味だ。下句の軽快なフレーズに作者の個性が窺え立ち止まった。

村野次郎への旅（173）

昭和期の「香蘭」（八）

千々和　久幸

今月は「香蘭」第五巻第五號即ち昭和二年（1927年）5月号を読むことにする。続きものとしては號数が少し飛んでいるが、この間の「香蘭」についてはすでに書いてきたという感じが抜けない。

調べれば分かることだが、今のわたしにはどこかで書いたという重複感があって筆が進まない。ことほどさように、目下のわたしは雑務に取り紛れて記憶が混乱しており未整理を承知の上で書き継ぐことにする。いずれ本筋に戻って来るだろうから。

目の前に広げているのは、昭和二年（1927年）「香蘭」第五巻第五號（昭和二年五月一日発行）の目次である。表紙畫裏畫及び題字はこれまで通り北原白秋で総頁52、編輯兼発行者の田中次郎は例月と異動はない。

目次を見ていけば巻頭の短歌欄は村野次郎、酒井廣治、今井嘉雄、本間樂寛、南部松若丸、川村浩、芥子澤新之介、石野正太郎、橋本政一、杉浦翠子の十名。

次いで杉浦翠子の「三ヶ島葭子さんを思ふ」、短歌欄に成田憲三、眞島勝郎、佐藤達夫など九名。前月歌壇合評（杉浦翠子、橋本政一、今井嘉雄、本間樂寛、村野次郎）、皐月集に今福公一、大貫迪子など十三名。香蘭合評會、佐藤達夫の「白秋先生の短歌に於ける音樂的要素に就いて」、さらに鳰鳥集　杉浦翠子選に十七名、若葉集　酒井廣治選に十四名、微風集の村野次郎選に二十五名、それに六號雑記、歌會記事、編輯後記と続く。

例によって巻頭の村野次郎「銀行破綻」六首から読んでいこう。

銀行破綻　　村野　次郎

①あやぶみて戸口ひしめく人の群れとどむる
　聲もきこえざるべし
②初めより持たずばよきを物持ちて憂ひまどへる人ごころあはれ
③塞(セ)きかぬる人のこころのかなしもよ玻璃戸やぶりて血を流したる
④金持てる人らちまたに争へど貧しきものの安けくあるらし
⑤門のべに銀杏植えたり幹なでて瑞枝(みづえ)張る日を思ひ樂しむ
⑥楓(かへで)の葉すでにのびきりし頃ならん風にふかれてゆたかに揺れ居り

タイトルになった「銀行破綻」は一般的には昭和金融恐慌として知られている。この恐慌は経済不安と銀行の取り付け騒ぎによって特徴づけられている。

背景として、第一次世界大戦後の日本は慢性的な不況に直面していた。戦後不況や関東大震災などが経済を揺さぶり、企業や銀行は不良債権を抱えていた。特に中小銀行は経営状態が悪化し、社会全般に金融不安が広がっていた。

この一連は、そんな世相の混乱状態を作品化したものである。村野先生の時事への関心の強さは、作歌当初からのものである。時に

先生は三十三歳。

①の歌、結句の「べし」は推量で、この事態を新聞かラジオで間接的に体験されたものであろう。非常時における人間の慌てふためく行動が生々しく活写されている。

②の歌、当事者でなければこう冷静に事態を見ておれまい。それにしても一、二句は具体的な行動よりも、一歩引いた地点での感慨が表現されている。ここで処世訓を開示するところが大人である先生の大人たる所以である。傍観者のゆとりだとは言わないが、処世訓はあっさり言えば「説教」である。

僅かなユーモアをたたえたアイロニーの匂うところがおかしみを誘う。

③上句は②と同様のあしらい方で、先生の悠然として慌てず騒がずの人生哲学が開陳されている。所詮は余所事なのだ。

というのは、わたしには後の白秋の「香蘭」顧問辞退から「多磨」創刊に至る一連の騒動が脳裏にあるからである。あの当時の「香蘭」と村野先生の周章狼狽ぶりは、「悠然として慌てず騒がず」とはいかなかったからだ。話が逸れた。

③の歌、②の上句同様、事実の描写の前にまず所感が述べられて、しかる後にこの所感を事実がフォローするという構成になっている。良くも悪くもバランス感覚を感じさせる。

④の歌、対岸の火事と言ってしまえばそれまでだが、この歌にも具体を見るよりも先生の人生観が前面に出ている。「金もてる人」と「貧しきもの」を対称的に捉えたところに、あらま欲しき人生訓の匂いがする。そこに一片の事実はあるとしても、それが通俗と紙一重であるところは警戒すべきであろう。

⑤の歌、⑥の歌と共に直接的には「銀行破綻」とは別の世界が歌われている。一連が一つのテーマという訳ではない。

それというのも、開高健のこんな新聞記事を読んだばかりだからだ。

「明日世界が滅びるとしても　今日あなたはリンゴの木を植える　開高健」（クリアファイル、朝日新聞24年6月11日）

わたしは不覚にも先生の没年（1979年、85歳）を越えてしまったという思いが深い。

⑥の歌、眼目は下句、今しがた銀行破綻に伴う世上不安と人間の浅ましい姿を見てきた先生は、ここではもう平常心にもどり「楓」に吹く風に心を遊ばせている。

前号歌壇月評を紙幅のあるだけ覗いておこう。この歌の評者は杉浦翠子、橋本政一、本間樂寛である。

橄欖

林道にこもる朝の氣冴えてをり木々の芽ぶきもほどちかゝらむ　小笠原文夫

（翠子）小笠原さんは、ゆとりのあるお歌を作られる方だけれどもそれがどうかすると安易になりたがる。このお歌なども餘り常套的の表現手法に陥つた。「殊に冴えてをり」は苦心が足りない。

（政一）小笠原君らしいよみぶりである。この歌、通りよくうけ入れられはするけれど、下句のびのびとしてゐるのに上句が如何にも硬く感ぜられる。また樹の間の道を、りんだうと讀ませるのであらうがこれは他に適切に使へる詞があると思ふ。さして悪い歌ではあるまい。

（樂寛）こう易々と歌を作られる氣持を羨ましく思ふ。と同時に作者はこんな安易な境地で満足してゐるのではないかと案じられる。殊に上句は餘りに蕪雑ではないか、上句と下句との聯関もどうかと思はれる。

一頁公論（40）

富士山と与謝野晶子
～上九一色村について思う～

加瀬喜美江

三月に孫と富士五湖ドライブに出かけた。八歳の子に富士山を見せたかっただけなのだが、新しい発見の多いドライブとなった。三月二十七日、その日は前日の雨が嘘のような快晴。富士は早朝から美しい姿を見せてくれた。この旅が与謝野晶子夫妻の百年程前の富士五湖旅と繋がる事とは。晶子四十四歳。夫妻は富士を詠む歌を多く残していた。

まず私達は富士五湖で一番小さい精進湖を訪ねた。静かな湖面を滑るようにカヌーを漕ぎ行く人々が朝光の中の水面に溶け込んでいく。もちろん大きな富士山に抱かれながら。湖岸では八歳の子が冷たい水に触れ、叫びながら遊んでいる。駐車場に戻ると歌碑を見つけた。「これなあに？」と八歳の子は読み始めたが上手く読めないので一緒に読んでみた。

秋の雨精進の船の上を打ち富士ほのぼの
と浮かぶ空かな　　与謝野晶子

歌碑の裏には「上九一色村建立」とあった。

次に訪れたのは、本栖湖。駐車場にまた歌碑を見つけることができた。

本栖湖を囲める山は静かにて烏帽子ヶ岳
に富士おろし吹く　　与謝野晶子

歌碑の裏に又「上九一色村建立」とあった。

ここでの目的は野口英世の千円札の裏の富士の景色と同じ眺めを見る事である。湖岸から近い中の倉峠の急な登山道を三十分位登った所に展望台があり、そこから写真家岡田紅陽が撮影した「湖畔の春」の写真が元絵となっているそうだ。この日も運良く美しい逆さ富士を見る事が出来、神々しく神秘的な光景に心動かされた。財布から千円札を出して見比べてみたところ、桜の枝が無いだけで同じ眺めだった。予想以上の大変な登山だったが、美しい眺めが疲れを忘れさせてくれて、心に残る思い出となった。

次に訪れたのは、西湖。湖面の静けさを破るように八歳の子は石切り遊びに夢中になっていた。なかなか上手く石切りができなくて、ようやく二つ目まで石が飛ぶようになり大喜び。そして山中湖へ。湖畔にある文学の森公園にも歌碑があった。

富士の雲つねに流れてつかの間も心おち
ゐぬ山中湖　　与謝野晶子

高い山の上の雲の流れは速く、形を変えて富士の美しさも変化していく。

最後に訪れた湖の河口湖は車窓からの眺めとなった。

「上九一色村」は、今は無く、二〇〇六年に甲府市と富士河口湖に編入された。実は仕事で、何度か訪ねた事があり、お世話になった村であった。三十年程前のあの悲しい事件、地下鉄テロに関するその地は、今は公園になっているようだ。

晶子の歌は、百年程前とはいえ、訪れた所からの大自然富士の美しさを的確に捉え詠んでいる。「ほのぼのと浮かぶ」、「富士おろし吹く」、「心落ちゐぬ」等の表現に今と変わらぬ富士を百年後の今の私達にも想像させてくれた。

旅を好み、訪れた所で数多くの歌を詠み、歌碑を残している晶子。私達のように百年後に旅をした人々の心をも動かしてくれるのである。歌には時を超えた力がある。心癒やす力のある歌を何とか詠みたいものである。

富士に、晶子に、上九一色村に有難う。

「香蘭」とともに（11）

鈴木　桂子

――ほんとうにあたしでいいの？――

〈昨今は空前の短歌ブームだという。短歌がブームとして紹介されるとき、しばしば引用される一首がある。

ほんとうにあたしでいいの？ずぼらだし、傘もこんなにたくさんあるし　岡本真帆〉

２０２３年10月21日付の朝日新聞に掲載された「現代短歌の潮流」と題する石川美南氏の文章はこのような形で始まる。ここ数年来、若い人の間に短歌ブームが起きているという指摘である。勿論、その一方で、従来の結社型短歌会は、高齢化と会員減少のため、次々に廃刊、閉鎖に追い込まれていることも事実なのだが。そんな中で、若者は、なぜ、今、短歌ブームなのか。ブームに火を付け、今もその真っ只中にいる岡本氏の身辺からブームの内実をさぐってみよう。

岡本氏は１９８７年（昭和62）四万十生れ。学生時代、雑誌「ダ・ヴィンチ」で穂村弘氏の「短歌ください」と出会ったことが短歌との出会いになった。卒業後はコピーライターとして広告会社に勤務。仕事をする傍ら、仕事とは別に自分の感情を自由に言葉にしてみたいと、24歳から短歌を詠み始めたという。雑誌や新聞歌壇に投稿しながら、文学フリマで手作りの歌集を出品したりと、短歌にはかなりの思い入れがあったようだ。そんな日に、ネットの短歌サイトに前掲の〈ほんとうにあたしでいいの？〉の歌を投稿したところ、これがいわゆるバズって評判になり、ネット上で「短歌の人」として注目されるようになった。掲出歌は、〈傘も…〉の下の句を変えて、ずぼらエピソードを披露し合う大喜利でネットは大いに沸いた。作者の岡本氏自身も、浴槽にイクラのパックを浮かべた写真と一緒に、〈凍ったいくらを風呂で解かすし〉と投稿したところ、13万５０００の「いいね」が付いたという。ＳＮＳの力恐るべし。それにしてもこの13万５０００という数値は何を意味するのだろうか。たった三十一音に、即座に、これほどの〈共感〉が集まろうとは。余りに驚異的な数値である。メールやＬＩＮＥなど、短いセンテンスで物を言うことに慣れている若者が、短い詩型である短歌の〈面白さ〉に気付き、その〈遊び〉に共振したということなのだろうか。

いずれにしてもここでは、ネットから歌壇的リーダーとは別の、〈スター歌人〉が誕生し、新しい短歌の流れを作り続けていることが重要なのである。坂井修一氏は、〈ＳＮＳが作品を発表する場として公平に機能しており、歌壇の権威主義をつき崩す場を提供しているのは良いと思う〉、また〈歌の世界をよりカジュアルにしたのも私はよいことだと思っている〉、これからはネット短歌まで目を通し、それらを踏まえた上で短歌の動向を把握しなければならないと、現代のネット短歌を積極的に推されている。新しい表現が現われた時、それを未熟と見るか新しさと見るかは、常に評価が別れる。歌壇意識の緩いネット短歌には、どうしても〈それを短歌といえるか〉という否定論がつきまとう。しかし歌壇外でも歌人は確実に育っている。ライター的技とその感性によって詩的文体に転換された岡本氏の表現は、第一歌集『水上バス浅草行』となって、さらに読者を増やし続け、短歌人口を増やし続けている。すでに第二歌集も出た。

続・酔風船（9）

千々和　久幸

かなしみの繭

わたしの少年時代はオトコは強くなければならなかった。何よりも育った環境がオトコっぽい土地柄だった。八幡製鉄と筑豊炭田に挟まれた小さな町に過ぎないが、火野葦平の「花と龍」や後年はやくざを演じた高倉健に象徴されるような、荒っぽくまた湿っぽい土地柄だった。何よりも「軟弱」であることが嫌われた。ナンパ（軟派）はマメオトコと軽蔑され仲間からは爪弾きにされた。

村野次郎先生は府立第二中学校（現立川高校）に入学されたが、実家が商家であることもあって、間なく早稲田実業に転校させられた。文学は人間を「軟弱」にすると言う父の意見に従わざるを得なかったからだ。村野家では文学は「軟弱」と同義語だった。「軟弱」は商売の役に立たないという実利精神が家訓だった。

だから次郎先生は早稲田大学では文学部ではなく商学部、同様に四郎氏も慶応では経済学部である。後に四郎氏は知る人ぞ知る（知らない人には初耳だろうが）「肉体に実業を、精神に詩を」と村野家の思想を見事に統合して見せたのだ―とわたしは勝手な理屈をつけて四郎氏のフレーズを胸に仕舞ったのだった。

話を戻そう。同じ「軟弱」を嫌うにしても北九州で言う「軟弱」（軟派）と、村野家の「軟弱」とではニュアンス（意味）が違う。北九州は土地柄、環境（世間体）によって作られた（ねじ曲げられた）オトコ神話であり、村野家は実業優先という家風が生み出した実利的リアリズムに基づく。

わたしは文学に憧れるセンチメンタルな少年だったが、中学・高校時代は野球部で通した。だが一方で新聞部や文芸部、演劇部に籍を置く友人の存在がいつも気になっていた。そして彼らの書くものには一通り目を通していた。

それが大学に入り、下宿生活の単調さの中で読んだ北原白秋の『桐の花』に手もなく感電し、突如文学を身近に感ずるようになった。野球少年が遅れて文学少年になった。気が付くと詩を書き、短歌を詠むようになっていた。あれほど敬遠した「軟弱」な世界に漕ぎだしてしまっていた。

短歌は「かなしみの繭」だと思った。後に第二歌集『祭という場所』（1991年、平成3年刊）でわたしはこんな歌を残している。「何気なく交しし言葉の断片が時経てかなしみの繭となりゆく」、というのがそれ。短歌は悲しい光を放つ「かなしみの繭」だというのが当時のわたしの実感だった。

その後、お隣の世界からは「短歌は羞恥の隠蔽装置」（富岡多恵子）、「壊れた自我の補助具」などと揶揄されたが、わたしは批判を承知で「哀しみの繭」を抱き続けている。短歌が「軟弱」な精神の発露であることを否定する気はないが、わたしの短歌への「愛着と憎悪」言い換えれば「短歌という負い目」は変わらない。それを越えあるいは克服する手立ては、短歌という詩の根にある「哀愁＝ペーソス、哀愁の情緒」という空気孔である。